

# ぐだ子兄が行く聖杯探索

河口

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カルデアスタッフだったぐだ子の兄が、何だかんでマスターになり、聖杯探索に参加する話です。

ちやんとぐだ子ちやんもいます。

オリ主が○○○からの転生者だったり、特異な魔術(かなりチート)を使ったり、色々あります。

わりとやりたい放題。

どうぞ「そんなのありかー！」と叫んでくださいw

## 目次

プロローグ	藤丸冬夜という人間	1
設定	—	5
運命の始まり	—	8
〇〇は	イオナズンの	11
	じゅもんを	—
	となえた!	—
魔術師と戦士	—	17

## プロローグ 藤丸冬夜という人間

藤丸冬夜という人間を知っているだろうか。

曰く、時計塔考古学科に所属しながらも、どこの派閥に与することもなく、何故か現代魔術論科に入り浸っている異端講師である。

曰く、まだ年若い魔術師でありながら、『ブライド典位』の階位を持っている。

曰く、彼の授業はとても難しいものの、理解さえできれば必ずと言っていいほど成功する。

そのような噂（というより、この話はほぼ事実である）をされる青年である。

藤丸冬夜は紛れもない天才であった。

何を言っているのだと思われる方もいるだろう。だが、これは紛れもない事実である。

齢五つの時に始めた武術は、齢八つの時には自らの師と並ぶ程となり、齢十の時にはそれぞれの世界で彼に勝てる者は居なくなってしまう。

また、その才能は学問においても発揮され、両親の手でたった一人アメリカへと留学させられた彼は、齢十七で有名な大学の大学院を卒業してしまった。

…大学ではない。

”大学院”を、である。

これを天才と言わずして何と言うというのか。

だが、彼は言うのだ。

自分は天才などではない、と。

これが不味かった。

…考えてみて欲しい。

どこからどうみても天才としか思えない人間が、「自分は天才ではない」と言い張るのを見て、あなたは思うだろうか。

一発殴り飛ばしたい気持ちにならないだろうか。

…藤丸冬夜の周りの人間は少なくともそう思った。

そもそも天才というものは、普通の人に紛れることが難しい人間であるというのに、彼のその態度は更に反感を呼んだのだ。

だからこそ、彼は行く先々で腫れ物のように扱われた。

簡単に言うなら、”ぼっち”だったのである。

…ちなみに彼に悪気はない。

ああ何たる不幸か！

彼の才能は常人には理解出来なかったのだ！

そう、“常人”には：

…では、常人ではなかったとしたら？

同じような天才であつたとしたら？

先に述べておくと、彼の生家は極々普通の家庭であつた。

…決して、“魔術”などというオカルトには、1ミリたりとも関係の無い家である。

”普通の家”のはずなのだ。

だが、一般の家庭に生まれたはずの彼は、魔術協会における三大部門の一角にして、魔術協会の総本山たる時計塔の講師にまでなつてしまったのである。

(なお、これに関しては、すべての原因は彼の研究内容にあり、彼の数少ない友人の1人が、彼を救うために奮闘した結果である。)

しかも、階位まで獲得して。

そして

彼の妹もまた…

これは本来は有り得なかった運命<sup>Fate</sup>の物語である。

## 設定

### 主人公

名前：藤丸 冬夜（フジマル トウヤ）

種族：人間

身長：167cm

体重：57.5kg

年齢：26歳

誕生日：12月18日

血液型：AB型

性別：男性

イメージカラー：青色

所属：時計塔・人理継続保障機関「カルデア」

特技：武術

好きな物：妹・美味しいもの・王様・研究

苦手な物：神・規則正しい生活

起源：魂

魔術系統：錬金術

魔術属性：空・虚

魔術特性：強化・転換

- ・カルデアの技術スタッフ
- ・オルガマリーによりスカウトされた
- ・時計塔考古学科講師
- ・典位

- ・ロード・エルメロイⅡ世とは友人関係にある
- ・魔術師としての誇りなど全くない男
- ・むしろ自分を魔術師ではなく未だ科学者だと思っている
- ・一応専門は錬金術になっているが、他にも色々使える
- ・私生活があまりよろしくないというかむしろダメ人間



・美味しいものは好きだが、基本的には栄養補給ゼリーとかで済ませるタイプ

・ちなみに大学時代の専攻はもちろん考古学  
・とある王を尊敬しているらしく、武道を始めたのもその王の様に  
なりたかったかららしい

- ・文武両道の天才であり、普通の人間からは疎まれる存在
- ・本人は自分を凡人だと思いついでいる模様
- ・軽いシスコン

## 助手

名前：ウイリアム・ベックフォード

身長：175cm

体重：61.5kg

誕生日：10月25日

血液型：A型

属性：中立・中庸

性別：男性

イメージカラー：灰色

所属：時計塔・人理継続保障機関「カルデア」

特技：掃除・洗濯・事務仕事etc…

好きな物：他人（特に冬夜）の世話

苦手な物：料理

起源：守護

魔術系統：錬金術・黒魔術

魔術属性：水

魔術特性：強化・結界

弱点：藤丸冬夜

- ・魔術の大家ベックフォード家の三男にして、最後の一人
- ・カルデアのスタッフ

・冬夜の元教え子にして現助手だが、冬夜のこととは弟のように思っている

・敵を作りやすい冬夜の緩衝材

・魔術師としての誇りなどは一切ないが、人に魔術を使うことに躊躇いを覚えない冷酷さを持つ

・善人とは言えないが、悪人でもない

・家事は得意だが、唯一料理だけが出来ない

・料理の腕前は殺人級（自覚あり）

・頭は良いが、運動能力はあまり無い

・人の世話を焼くのが大好きなダメ人間製造機

・冬夜の私生活を管理しているが、自分に料理の才能がないので、早く料理が出来る人間に冬夜を貰ってほしいと思っている模様

ベックフオード家

・魔術世界では結構有名な家系

・黒魔術を扱う

・数年前に1人を除いて全滅したと言われているが…

ぐだ子ちゃん

名前：藤丸立香

性別：女性

・皆さんご存知人類最後のマスター

・原作と変わりない予定

・尊敬する人は兄

・ブラコンの気がある

## 運命の始まり

「…遅い。」

時計をチラリと見て男は呟いた。

考古学科の授業はもう既に終わっているはず、と男——ロード・エルメロイⅡ世は思考を巡らせる。

別に約束をしていた訳では無い。

が、毎日同じ時間に来ている人間が来ないとなると、少々心配になるのも無理はないだろう。

全く世話の焼ける友人だ、と溜息を一つ。

若干頬が緩んでいることに本人は気づいていない。

バタバタと聞こえる足音。

次の瞬間、バンツと音を立てて扉が開かれた。

「ウェイバー！」

ロード・エルメロイⅡ世を本名で呼ぶこの男こそこの話の主人公、藤丸冬夜である。

「…ここではエルメロイⅡ世と呼べといつも言っているだろう。」

「エルメロイって言いにくい。」

「はあ…まあいい。随分と遅かったが、何かあったのか？」

「あ、そうだ。ウェイバー、カルデアって知ってる？」

「カルデア？…天文台がどうかしたのか？」

「それがさ、さつきオルガマリー・アニメスファイアって人が来てさ」

「待て冬夜。何でお前のところにロード・アニメスファイアが来るんだ。」

エルメロイⅡ世は、爆弾を投下した目の前の友人を凝視した。

冬夜の所属は考古学科であつて、天体科ではない。

普通であれば、天体科の君主ロードが彼を訪問するはずがないのだ。

「よくわかんねえんだけど、カルデアに協力して欲しいとか何とか…」

一瞬思考が止まったエルメロイⅡ世だったが、気を取り直して再度問う。

「返事はしてない、よな…？」

「ん？承諾したけど？」

ダメだったか？と首を傾げる冬夜に、エルメロイⅡ世は頭を抱えたくなった。

何故この友人は目を離すと厄介事に巻き込まれるのだろうか。

「承諾したのはお前一人だけか？ウイリアムは？」

「ウイルはいなかったから。」

状況は最悪である。

相手は天体科の君主<sup>ロード</sup>、オルガマリー・アニメスファイア。

撤回は出来そうにない。

だからといってこのままでは、全てが露見してしまう可能性がある。

何故ならば、藤丸冬夜本人が事の重大さを理解していないからだ。

それは非常に不味い。

であれば、方法の一つ。

彼を少しでも止められる男をついて行かせるしかない。

「はあ…冬夜、急いでウイリアムを呼べ。」

「ウイルを？わかった。」

ロード・エルメロイⅡ世は動き出す。

大切な友人を守るために。

「随分とご機嫌だな、オルガ。何かあったのか？」

「ええ！聞いてちょうだい！さつきね、考古学科の天才を見つけて、ダメ元で勧誘してみたら、彼、了承してくれたの！」

「へえ…」

「これできっと上手くいくわ！ね、レフ！」

「そうだね、オルガ。」

「考古学科の天才…ね。障害にならなければ良いが。」

○○は　　イオナズンの　　じゅもんを　　となえた！

カルデアに来てから数ヶ月が過ぎ、気づけばミッション直前。

冬夜はAチーム担当のスタッフとして中央管制室にいた。

最終チェックはすぐに終わり、担当するマスター達のバイタルも良好。

後はミッション開始を待つだけであった。

…冬夜の中では。

他のスタッフ達が、不安を少しでも和らげようと何度もチェックを行っている中、彼は唯一人虚空を見つめて立っていた。

「冬夜、少しは周りに合わせるといふことを覚えては？」

助手のウイリアムが、作業を止め、呆れた顔をする。

「理解はしてるんだが…やる意味の無いことをやっても…なあ？」

「なあ？ではありませんよ、全く。…まあ、気持ちは分かりますが。」

それでも、やるフリぐらいはしておくべきだと告げるウイリアムに、冬夜は肩をすくめた。

その時、冬夜は突然ハツとした顔をしたかと思うと、所長のオルガマリーのいる方瞬時に目を向けた。

「冬夜？どうし」

「ウィル、誰にもバレないように急いで自分の身を守れ。」

冬夜は何かをじっと睨みつけながら、ウイリアムに小さな声で告げた。

「え？」

「早くー！」

「わ、わかりました…！」

戸惑いながらも指示に従い、防御用の術式を構築する。

それを横目で見ながら、冬夜も自身に術をかけた。

その刹那、二人の視界は閃光に包まれた。

響く轟音。

全てが炎と熱風に覆われ、その凄まじい爆発の煽りで吹き飛び、瓦礫と化していく。

「な、何なんですか…これ…」

「さあ、な。」

〈緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。〉

「火災？火災じゃないでしょうコレ！」

「凄い爆発だったな。」

混乱してアナウンスにツツコミをいれるウイリアムの横で、冬夜は考えを巡らせ始めた。

爆発したのはコフィンが並んでいる場所。

コフィンの調整には自身やウイリアムも参加しており、不具合はないことを確認した。

まして爆発物など、絶対になかったと言える。

つまり、事故ということはありえない。

であれば、この爆発は故意的なもの。

何者かが魔術を使い引き起こしたものに違いない。

「…や…うや…冬夜！」

「！」

ウイリアムに強く肩を揺すられ、冬夜の意識が現実へと戻る。

「すまない、ウイル。どうしたんだ？」

「急いでここから出ないと！隔壁が閉じてしまいます！」

「…ああ、そういえばマニュアルにそんなことが書いてあったな。」

「書いてあったな、じゃない！隔壁が閉じたら館内洗浄に巻き込まれるんですよ！」

「まあ、大丈夫だろ。」

「大丈夫じゃなかったらどうするんですか！」

「何とかなる。」

「何とかなるって…というか、さっきから何をしてるんですか？」

モニターを操作している冬夜に、ウイリアムが問いかける。

「凍結保存。」

「ちよ、本当に何やってるんですか!?!犯罪ですよ!?!」

「…死なせるよりはマシじゃないか?」

「それは…」

周りに転がっている元同僚達を見回しながら言う冬夜に、ウイリアムは何も言えなかった。

冬夜とウイリアムには、少しだけが罪悪感がある。

それは、自分達だけが助かったことに対してのものだ。

あの時、ウイリアムだけでなく、全員に知らせていれば良かったのだろうか。

いや、それはありえない。

もし全員に知らせていれば、自分達はここにいない。

何故ならば、あの時、この場所には事件の犯人が居たのだから。

〈システム レイシフト最終段階に移行します。〉

「…何?」

〈座標 西暦2004年 1月 30日 日本 冬木〉

「え、何でシステムが…」

〈ラプラスによる転移保護 成立。特異点への因子追加枠 確

保。アンサモンプログラム セット。マスターは最終調整に入っ

てください。〉

「…爆発でも壊れなかったんだな。」

「現実逃避しないで下さい!…何とかして止められないんですか?」

「マスター達は皆危篤状態でさつき凍結保存したから…多分途中で止まるはず。」

「…冬夜、貴方は。」

「あ。」

冬夜は忘れていた。

自分にレイシフト適正があり、オルガマリーの手で予備要員としてマスター登録までさせられていた事を。

「あー…どうしようか?」

「こういう時こそ何とかするんでしょうが!」

〈観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。〉



「もう！今度は何ですか！」

憤慨していたウィリアムは絶句した。

文明の光が灯っていたはずのカルデアスが、真っ赤に染まっていたのだ。

「これは…」

〈シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において 人類の痕跡は 発見 できません。〉

「なっ…！さつきまで文明の光があったのに…！」

〈人類の生存は 確認 できません。人類の未来は 確認 できません。〉

「赤く染まる…？単純な人類の滅亡なら、光が消えるだけのはず…」

「考察している場合ですか！とりあえずレイシフトを」

「いや、レイシフトはこのまま行う。」

「はあ!？」

「このままじゃ人類が滅亡するからな。」

「そうですけど…！」

「ウィルはついてこなくていいぞ。」

「行きますよ…！…どうせ私には影響が無いですしね。」

冬夜の言葉に、ウィリアムは決意を固めた。

〈レイシフト 定員に 達していません。該当マスターを検索

中…．．．発見しました。適応番号0 藤丸冬夜 適応番号48

藤丸立香 を マスターとして 再設定 します。〉

「…え?」

「冬夜?」

急に表情が変わった冬夜に、ウィリアムは声をかける。

「待て、今、藤丸立香って…」

「どうしたんですか、冬夜?顔が真っ青ですよ?」

〈アンサモンプログラム スタート。霊子変換を開始 します。〉

「適応番号48番…」

レイシフト開始まで あと30

「数合わせの一般枠…ですよ？それが？」

2

「妹…だ…」

1

「…え？」

へ全工程  
す。✓

完了。<sup>クリア</sup>

ファーストオーダー

実証を

開始

しま

## 魔術師と戦士

燃え盛る炎の中、無人の街を冬夜は走り抜けていた。

ウイリアムとは逸れてしまったが、お互いの位置は把握出来る。だからそこには問題がないのだが…

「…まだ、こつちを狙ってるな。」

そう、彼は何者かに狙われているのだ。

次々と飛んでくる攻撃を避けながら走ってはいるが、敵は彼を狙い続けている。

それもそのはず。

彼は敵が自分を追うように仕向けていたのだから。

理由はただ一つ。

この街のどこかにいる妹を守るためである。

しかし、このままでは埒が明かないこともわかっている。

それどころか、早く攻勢に転じねば命を落とすであろう。

現に、冬夜の身体には少しづつ傷が出来始めているのだから。

「近距離戦にささえ持ち込めば何とか…よし、突っ込むか。」

他に方法がないから仕方ない、と誰かに言い訳をするかのようにはいて、冬夜は立ち止まった。

もちろんそれを見逃す相手ではない。

冬夜を狙っていた男…アーチャーは、即座に矢をつがえ、放ったのだった。

その頃

ウイリアムもまた、ある人物を探しながら、街を走り抜けていた。正直に言つて、この広い街の中で人を探すのは無謀である。

何しろ手がかりが少なすぎる。

わかっているのは、その人物の簡単な容姿のみ。

しかも、その情報でさえも数年前のものであり、変わっている可能性があるという。

妹を守って欲しい。

最初にそう告げられた時、ウイリアムは怒った。

ウイリアムにとっての1番は冬夜だ。

1度もあつたことがない彼の妹ではない。

だが、彼にとっては違う。

彼にとって妹の存在は、自分の命をかけても守るべきものなのだ。

そこがウイリアムにとっては気に入らなかった。

だが、だからといって、ウイリアムはその願いを無下にはできない。

他ならぬ冬夜の願いのだから。

「うるさいわね、どうでもいいでしょうそんなコト!」

不意に響き渡った怒声に、ウイリアムは思考を止めた。

「この声…まさか…いや、そんなはずは…」

物陰に隠れて、声のする方を伺う。

そこには4人の男女がいた。

恐らく冬夜の妹だと思われる、オレンジ色の髪の少女もいるようだ。

Aチームのマスター候補生であつたマシユ・キリエライトは、何故か大きな盾を持っており、服装も鎧へと変化しているが、重要なのはそこではない。

「やはり…何で所長がここに…?」

管制室にいたスタッフの生存は殆どありえない。

マシユ・キリエライトが生きていることから、絶対ではないかもしれないが、見た目の変化から察するに、あれは特殊な事例であろう。

それに、冬夜の見ていた方向から、爆心地は大体予測できる。

だから、ありえないのだ。

オルガマリー・アnimスファイアが生きていることは。

「…もしかして、生きているという訳ではないのですか?」

ウイリアムには心当たりがあった。  
恐らく彼女は気付いていないのだろう。  
自分が死んでいるということに。

さて、ウイリアム・ベックフォードは魔術師である。  
いや、魔術使いと呼ぶべきか。  
兎も角、彼は戦士ではなかった。

だから、気付かなかったのだろう。

「ところで……さつきからこつちを伺ってる奴、出てこねえなら敵と見  
なすが、いいんだな？」

青い髪をした男……キャスターが、最初から気付いていたことに。